

挿絵画家としてのルートヴィヒ・リヒター — 息子ハインリヒによる『回想』の続編 (抄訳) —

糟谷 恵次

Ludwig Richter als Illustrator
Aus: Heinrich Richters Fortsetzung der „*Lebenserinnerungen*“
Ludwig Richters

Keiji KASUYA

ここに抄訳を試みるのは、未完に終わったルートヴィヒ・リヒターの自伝『あるドイツ人画家の回想 *Lebenserinnerungen eines deutschen Malers*』(1885)の補筆部分である。筆者は画家の息子ハインリヒ・リヒターであり、自伝刊行の編者として版を重ねる過程でこの計画が生じたという。1836年から1847年にかけてのドレスデン時代を最終章とする『回想』には、なるほど、木版画にかかわる、画家のもっとも旺盛な活動時期の叙述が欠落している。自伝執筆を父に勧めたハインリヒであればこそ、その欠落を埋めたいと願ったとしても当然であったと云えるかもしれない。しかし、この続編には、これまでいくつかの異論も唱えられ、その正当性が問われた経緯もある。事実、これまでに刊行された何点かの『回想』の編者は、意図的に「続編」を除外している。

しかしながら、編年体の、実に明瞭な叙述となっているこの「続編」が、挿絵画家としてのリヒターの制作の展開を理解する上で貴重な基礎資料となってきたことも事実である。

「ハインリヒ・リヒターによる回想の続編」

苦しみの末に愛娘は逝った。その死は、リヒターの心の底を揺さぶった。しかし、堅い信仰心のおかげで平静を取り戻した彼は、ふたたび芸術活動に復帰した。出版業者の求めに応じ、こまごまとした挿絵の仕事を数多くこなしながら、1847年に彼は、すでに1845年に開始された油彩画『春の花嫁行列』を完成した。この絵のコンセプトには、リヒャルト・ワーグナーの『タンホイザー』の影響が見受けられた。リヒターの属したあの小さな集団は、まだ有名ではなかったワーグナーの『タンホイザー』に、独特な天才性をすでに当時いち早く察知したのであった。……しかし、キリスト教的基盤の上で成長したリヒターの芸術観は、ワーグナーの主義主張と一致するものではなかった。だが、友人シュヴィントと同様にリヒターも、あらゆる芸術の中でもっともロマン主義的といえる音楽を愛好したばかりでなく、自己の芸術的感化と創作にとって音楽が生活に欠くことのできない要素のひとつであった点で、正真正銘のロマン主義者であった。線と色彩からなるリヒターの領域に、リズムと音調のこの国からさまざまな刺激がもたらされ、彼の創作物に影響を及ぼした。それゆえ、彼の作品を評価する際、そうした種々の影響が無視されてはならない。冬の夕べの食事の後、彼はよくギターを持って居間に戻ってくると、その伴奏に合わせて、いくぶん弱々しくはあったが、たいへん心のこもった声で歌をうたい始めるのであった。隣室にいた子供たちは、父の夕べの音楽会に熱心に耳を傾け、その音楽を聴きながら夢路についた。

1847年という年は、彼から娘を奪い去ったうえに、彼の父親にも死に至る病をもたらし、父親はその病か

ら二度と癒えることがなかった。秋に散歩の途中にひいた風邪がもとで寝たきりになった父は、忍耐強く苦しみと戦った末に、胸水腫を併発し、それが原因で1848年にこの世を去った。物事の新しい秩序が生まれたまさに境目のこの年に、ルートヴィヒ・リヒターの父は逝った。家族の者たちは心にぽっかり穴が空いたような苦しい気分を長いこと味わった。

すべての人の心を揺り動かした1848年から1849年にかけての政治の嵐は、リヒターをも巻き込まずにはいなかった。日々報じられる刺激的な新聞記事が彼の敬虔な心を揺さぶることはなかったが、彼の敏感な神経のバランスを乱した。歴史感覚の才能に優れていた彼は、すべての世界的事件に生き生きとした興味を抱き、毎日、新聞を読んでいた。しかし、日々の政治議論、すなわち、いわゆる酒場政談には関心がなく、そのようなものは自分には皆目分らないと思っていた。

一般民衆の武装蜂起はあの日の合い言葉であったから、他のもっと大きな都市と同様にドレスデンでもさまざまな義勇軍がつくられた。美術学校の生徒たちも、いわゆる学徒義勇団に召集され、かなりの数の教師たちもこれに参加した。リヒターさえも参加の説得を受けた。しかし、まもなくすると彼は、そのようなことが自分のためにはならないと感じた。軍隊でのいろいろな苦労で彼は不眠症になり、鉛筆にしか慣れていない彼の手には、鉄砲を扱うことなど至難の業であった。そこで彼は、野蛮な戦いの技術を放棄する決意を固めた。兵役免除を願い出てそれを受理された彼は、ふたたび想像力の翼をはばたかせ、自作の『聖ゲノフェーファ』に描かれたあの平和な静寂の森の中へと身を潜めた。ちなみに、1847年に創作されたこの作品は、今度はザクセン芸術協会のためにエッチングされた。この絵と対をなす作品として制作されたのが、二枚目の森の光景『母と子をおどかす炭焼き服のリューブツァール』である。これら二枚のエッチング作品に彼は翌年まで従事した。ドレスデンで血の五月暴動が勃発し、通りに太鼓の音がけたたましく鳴り響き、バリケードが張り巡らされたあの日、リヒターは毛皮の部屋着姿で仕事机に向かいながら、平和な牧歌的作品のエッチング作業に没頭し、戸外の喧噪によってこのデリケートな作業を邪魔されるようなことはなかった。翌日になってようやく、彼は家族を連れて町を出た。反乱軍と軍隊との戦闘が終わるまで、彼は町を離れた。

リヒターは最期の三年間に、多くの刺激的で辛い苦しい事柄を体験したが、たいへん勤勉であった。「あわや中断せざるをえないという事態が何度もありました」と、1849年の手紙の中で、彼は溜息まじりに記している。「わたしは壁が揺れるほど描いています。そして今、ベヒシュタインのメルヒェンとシェイクスピアを制作中です。」エッチングの大作『リューブツァール』と『ゲノフェーファ』の他に、夥しい数の出版者の依頼を彼はこなしていた。その中には、『挿絵入り青少年新聞』の多数の挿絵、ニーリッツの民衆暦、カンペの『ロビンソン』、レーシュケの絵本、またその他に数々の青少年雑誌があった。1849年にはホルン編『糸紡ぎ部屋』がリヒターの挿絵入りで初めて世に出た。彼はその年から1860年までこの国民年鑑に挿絵を提供し続けたが、その挿絵の数は500点以上にのぼる。いわゆる『リヒター・アルバム』が出版されたのもこの頃であった。これは、出版者G・ヴィーガントによって企画編成され、1848年に編集された木版画の選集である。

長い間、全力を振り絞ったことで、彼の健康はひどく損なわれていた。絶え間なく不眠症が続き、神経は疲労し、他にも憂慮すべき症状がいくつも表れた。リヒターはしかし、自分の健康のために費用のかかる湯治旅行をする決心をしかねていた。なぜなら、たいへんな努力をして得た金とアカデミーの給料で、やっとつましい暮らしができる生活状態であったからだ。だが、心配する妻の執拗な懇願と、医師の断固とした要請によって、最後には彼の考えも変わり、オステンデへの旅立ちを決意するにいたった。この海辺の保養地を彼が選んだ理由は、そこに打ち寄せる強い波風が身体に良く、芸術家としての彼の心には、オランダの美術品が最大の清涼剤となるであろうと期待したからであった。その願いは叶えられた。この海辺の保養地は彼の健康に活力をもたらし、しばらくの間、彼は何の苦痛もなく活動できるようになった。また、古ドイツならびにオランダの巨匠たちの作品を現地で味わい勉強することで、それらは彼の芸術に、新しい見方、新しい刺激、新しい素材を提供した。そのようなわけで、オランダへのこの旅は、成果に富む重要な人生の一時期となった。そのとき集められた芸術的印象が自己の創作にどのように応用されるのかを、彼は、主にメ

ムリングとヴァン・アイクの作品の観察によって惹き起こされた着想をもとに、次のような含蓄深い言葉で要約している。

「これらの画家の精神を捉え、ドイツ芸術のために同じ道をとるならば、それは今でも正しいことと言えるでしょう。彼らの不完全な事柄や、彼らの時代の独特な事象を模倣してはなりません。反対にわたしたちは、彼らと同一の忠実さと健全さ、愛と誠実をもって、わたしたちの時代と環境を写し出そうと努めるべきなのです。

わたしが今、描きたいと思っているのは、自分の住むザクセンの景色と山小屋です。そしてそれから、今いる人間たち。それも中世風の衣装を纏わせてではありません。春の日の、緑のトウモロコシ畑と黄色のカブ畑、若葉の菩提樹と果樹、神の祝福を願いながら額に汗して畑を耕す農夫。その父に水を運び、朗らかに遊びまわり、花束を編む、小さな、泥だらけの無邪気な子供たち。大人は働かなければなりません、子供たちはまだ幼年時代という楽園の時代に生きているのです。それから、空を舞うツバメ、野原のガチョウ、藪の中のホオジロ、犬や牛。これらすべてのものを、まさに忠実に、厳格に、心からの愛情をこめて、ムリングの意味で、敬虔かつ素朴で愛情深い方法で再現するなら、十分に意味あるものになるでしょう。必ずしもわたしたちに聖人画が描けるわけでもありません。わたしたちの誰もがそれを描けるわけでもないのです。」

彼のことをたいへん気遣っていた妻に宛てた手紙には、オステンデ滞在中の彼の心情をかいま見せる箇所がいくつかある。

「わたしは何も描いていない。描きたいという気にもならないし、描く暇もないのだ。水浴をするほかに、海風を吸いに海岸を散歩すると、もう時間がなくなってしまう。ここ数日はかなり荒れた天候だった。特に港の入り江に打ち寄せる波はひどいものだった。その後は、日光浴にとっても快適な天気だった。そんなわけで、しばらくたっても背中がヒリヒリしている。まるでアルコールと胡椒と塩を塗られて革の笥で叩かれたあとのようだ。

ひとりでいる暇な時を利用して、これまでのことやこれからのことをじっくりと考えている。生きていると、かなり多くの塵や埃が生じるものだ。習慣はそれを気づかせてはくれない。そんなわけで、魂を清める日光浴のようなものが不可欠だ。最初のうち、わたしは神様に、わたしの身体と魂と心を祝福してくださいように、とお祈りをした。そして今まで神様は忠実に慈悲深くわたしをお助けくださった。わたしのような者が、たとえ一時でも誠実にこの生命を使うなら、生命は（今わたしが見ているような）きわめて単調な人生でも、豊かなものであり、実に豊かなものであり、わたしたちの中に精神の本物の果実を生み出してくれるのだ。この生命を正しく用いよう。この人生において永遠の生命が豊かに繰り広げられるように。そのための萌芽を育てない者が、はたしてこの世にいるだろうか。その芽をどうやってあの世で育てろというのだろうか。

親愛なる妻よ、わたしはお前に数えきれない数の口づけを送る。どうか息災でいてほしい。それから、わたしのことをあまり心配しないように。たしかにしばしば苦しみと不安は経験するが、この老いたアダムのためにすべてがそんなにすらすらと過ぎるとしたら、どのようにして信仰と愛を実証したらよいだろう。偶然耳にしたことだが、わたしの住まいのすぐ隣にプロテスタントの教会があり、ドイツ語で説教が行われているそうだ。そんなわけで明日の日曜日には教会に行くことができる。お前が考えているとおり、わたしはそれをたいへん楽しみにしている。—— たとえうわべは限りなく望ましいものであろうとも、愛する人や尊敬する人のために何もしない無為な生活（人生）というものが、いかに空虚で何もない、死んだものであるかを、当地でわたしは実感している。」

ドレスデンに戻った彼は、旺盛な創作意欲と新たな気分で、彼を待ち受けていた新しい挿絵の仕事にかかった。1849年は、彼に辛い別れをもたらすことになった。ミュンヘン美術アカデミーの招聘を受けていた親友テーターが、家族より先に、晩秋ドレスデンを去ったのである。この友人の転居はリヒターをひどく悲しませた。芸術だけではなく、共通の宗教的欲求や親密な家族関係によって、この二人は心から結ばれ

ていた。1850年、リヒターはミュンヘン経由でバイエルンアルプスへの三週間にわたる休養旅行に出かけた。その頃そこにはシュノルが滞在しており、王宮で未完のフレスコ画に最後の手を入れているところであった。

また、このミュンヘン旅行によって、長年心に抱いていた願いが成就した。G・H・フォン・シューベルトと個人的知己を得たのである。ザクセンのホーエンシュタイン家出身のこの同郷人に、リヒターは心の底から惹かれるものを感じていた。ちなみに、自伝の中でリヒターは、自分を導く教師として、ケンピスとクラウディウスとならんで、シューベルトの名を挙げている。リヒターはシューベルトの教化的書物を愛好し所有しただけでなく、ドレスデンでは彼の科学的著作をほとんど購入していた。というのも、彼はそうした著作の中で、すでにローマ滞在時からロマン派の教理として親しみ共感していたシェリングの自然哲学に基づく多くの考え方に出会ったからである。

1851年に企てられたオステンデへの二度目の療養の旅から、画家は見聞によって得られた芸術的刺激の戦利品をふたたび持ち帰った。その中には、かなりの数のライン地方のスケッチがあった。

1850年から1856年の時期に、リヒターの創作力はいっしょに豊かな展開を示した。ホフの作品目録によれば、この七年間に彼は1048点の木版画を書籍に掲載した。この活発な制作時期におけるもっとも充実した成果の一部が、G・ヴィーガント社から上梓された次のような版画作品である。すなわち、ヘーベルの『アレマン詩集』、ベヒシュタインの童話集、『ゲーテ・アルバム』、そしてとりわけ重要な『考えさせられ、ためになる』が三分冊で出版された。

これらの多くの原画は木版画として忠実に再現されたが、その主要な功績は木版画の彫版師アウグスト・ガーバーにある。独力で木版師となったガーバーは、ドレスデンにやってくると、そこで1848年に、出版を控えたりヒターの小さな挿絵を数点彫版する好機を得たのであった。それらの版画を見たりヒターは、自分の原画が実に鮮やかに忠実に再現されていることに感心した。ガーバーはその後、もっとも有能な転写木版師の一人に成長した。リヒターの愛娘エイミーは、しばらくの間ガーバーから教えを受けた。エイミーは素晴らしい進歩を遂げ、父が手がけたレーシュケの絵本の小型挿絵を数点、またヘーベルの詩集の中の一枚を制作するまでになった。この授業によって、教え子と教師の婚約が成り、両人は1851年に結婚した。

『考えさせられ、ためになる』では、挿絵の分野ではじめてリヒターは自由に翼を羽ばたかせることができた。なぜなら、前もって書かれてあるテキストに縛られることなく、作品の素材や形式を自分で選ぶことが許されたからであった。この作品は、ドイツ国内で賞賛を得たばかりでなく、フランスでも彼の仕事に芸術愛好家たちの注目をはじめて向けさせた。モンペリエ大学の学長である美術史家ローランから、彼は一通の手紙を受け取った。そこには次のようなことが書かれていた。「貴兄の作品ほど『考えさせられ、ためになる』というタイトルにふさわしいものは他にありません。」

春が訪れるとすぐにリヒターは家族を連れて、ある農家に移り住んだ。その家はドレスデンから一時間の距離の、エルベ河畔のロシュヴィッツ村にあった。ほとんど三十年にわたり、彼は決まってこの地を定期的に訪れ、その村の小径や林道で、作品のための画趣に富んだ題材を集めては、閑静な仕事部屋で木版画や水彩画の多くを創作した。

1854年にもリヒターはロシュヴィッツに逗留していたが、そのときの宿泊場所は、村の北の森のはずれに位置する田舎家であった。家のまわりを果樹や野原や葡萄畑が囲んでいた。高台からは、ベーメンの山々やエルベ河畔北側に位置する都までをはるかに見渡すことができた。そのため、緑に囲まれた、わが家のようなこの閑静な住まいは、まさに彼の気持ちにかなった希望どおりのものであった。至福に満ちた春の気分の中で、彼はこの山の避難所をこう賞賛している。「おお神よ、山上のわが家から眺めるこの広大な景色は何と素晴らしいのでしょうか！真つ青な深い空、広大な緑の世界、美しく明るい五月の風景が無数の声で生き生きとしています。まさにそこに、天上におられる主の美を、ありとあらゆる感性的現象の中で、そしてわが五官を通じて感じます。

わたしを取り巻くすべてはこの世のものです。もしわたしが、ただ黒い文字と肉体のない思想だけでしか

認識し、愛し、尊敬することができないなら、それは何と哀しいことでしょう。花の咲き乱れる樹に、蜜蜂たちがブンブンと群がっています。芳香を放ち、羽音を立てながら。—— 神の存在を論じる神学や哲学の才知に富んだ論文よりも、そんな光景を眺めることの方が、わたしにはしばしば好ましく思えます。」

旧友の宮廷画家エルンスト・エーメが、家族とともにリヒターの近隣の別荘を借りて住んでいた。そんなわけで、昼間の仕事が済むと、家族は親しく交際し、二人の友人はしばしば森を散策しながら互いの心情を語り合った。ふだんはたいへん快活で、楽しいユーモアの才能の持ち主であったエーメは、その頃は憂鬱な気分になられることが多かった。おそらく、肺病が原因であったと思われるが、ひょっとすると死期が近いことをひそかに予感していたのかもしれない。翌年の春、彼はもはやこの世にはなかった。

とても幸せなスタートを切ったリヒターの別荘暮らしは、これを限りにたいへん辛い苦悩の日々で終わることになった。突然襲った不幸な出来事について、ミュンヘンの友人テーター宛の手紙の中で、彼は自ら次のように書いている。「わたしの妻は、夏の間ずっと、ふだんとかかわらず元気で健康でした。ただ、しばしば目眩を訴えていました。八月三日のことでした。わたしたちはエーメ一家（彼らもロシュヴィッツにいて、近所に住んでいました）や、数人の若い人々と楽しい時を過ごしていました。偶然ガーバーとハインリヒもその場にいました。妻はたいへん陽気で、心から楽しそうな様子でした。ところがその時、妻が突然にボーとした目つきでわたしの目の前の草むらに倒れ込み、意識を失ってしまったのです。妻は口もきけず、わたしの手をギュッと握りしめました。驚いたわたしたちは、小部屋へ妻を運びました。すぐに医者が駆けつけてきました。卒中の発作という診断でした。二度と意識の戻らないまま、真夜中過ぎに、愛しい妻の心臓は止まりました。—— たった三時間前には元気だった妻が、死んでもういないのです。わたしは茫然としました。しかし冷静でした。あの方は、主は、ご存知です。なぜそのようなことを起こさせたのかを。主の御心はつねに正しく聖なるものです。—— しかしわたしはまだ、心臓が半分ひきちぎられたような思いに駆られています。—— ああ、どれほど妻のことを愛していたことでしょう。それだけの価値のある妻でした。—— 繰り返すはもうやめましょう!!——

ハインリヒが一切の手配をし、面倒をみてくれました。子供たちの愛情が、特にハインリヒと優しいレンヒェンの愛情が、昔も今もわたしには大きな慰めです。ハインリヒは一週間後にライプツィヒでの学業に戻りました。レンヒェンは今、わたしのために家事をしてくれています。かくして神はこの試練を和らげてくださっています。そして子供たちにとっても、本当の恵みはその試練の中にあったのです。あるいは、主は祝福をその試練の中から育てになられたのです。そのことが今わたしにはよく分かります。大切な妻を失った心の痛みも和らいでいます。祈りによって、心の中でわたしは、神の御前ではつねに妻とひとつです。妻は天上の教会でキリストの恩寵に守られ、わたしは地上の教会で同じ恵みに守られています。」

今回はとても楽しげに一緒に田舎へやってきた愛しい妻をロシュヴィッツの小さな墓地に残したまま、10月、彼は二人の娘たちとともに町の住まいに戻った。

次の仕事は、ザクセン芸術協会のための『聖夜』と題するエッチングの大作であった。

この作品と並んで同時に、婿のガーバーによって編集された聖歌集『キリスト者の喜び』のために多数の図案が生み出された。妻の死以来、つねにリヒターの上に重くのしかかった苦悩は、『キリスト者の喜び』のどの絵にも、格別内面的で宗教的な心の温かさを与えた。たしかに大部分の絵から、信仰の喜びを表す気分が語りかけてくる。しかし、いくつかの絵からは、敬虔なキリスト者の希望によって和らげられてはいるものの、心の中にある試練の憂鬱な調子が響き出している。たとえば、「汝が道を歩め」などのような木版画作品のように。

1855年、リヒターは数多くの絵を発表した。『考えさせられ、ためになる』の第三分冊もそのひとつであった。『キリスト者の喜び』と『糸紡ぎ部屋』が書籍市場に姿を現した。一家にも喜ばしい出来事があった。娘ヘレーネがドレスデンの工場主クレッチュマーと婚約し、リヒターの芸術活動に対しても名誉ある賞が贈られた。油彩画『春の花嫁行列』がパリの世界展覧会で金賞を得たのである。また、祖国の芸術に外国から名誉ある賞が贈られたことを祝い、ドレスデンの芸術家たちによって松明行列が行われた。

にもかかわらず大晦日の日記の中で彼は、次のようなメランコリックな筆致でその一年を振り返っている。

「愛する大切なアウグステが亡くなってからは、深い悲しみの中で暮らしてきた。悲しみの夜は毎日に増し、もはや朝日の射す気配もなかった。最後には、心も死んだように荒れすさみ、毎日を生き抜くのが精一杯であった。まるで主が、わたしには耳を貸してくださらないような気がして、苦悩は絶頂に高まった。」

彼はすでに以前から、敬愛するヴァンツベックの使者クラウディウスが素朴な言葉で行ったように、主の祈りを民衆的な意味と精神で素朴な絵によって説明したいと考え続けていた。この企てが今や実行に移された。出来上がったのは、主の祈りの九枚の絵であった。それらはまさに彼のもっともポピュラーな作品のひとつに数えられる。

リヒターは、(ホフのカatalog記載によれば)1856年までに、2000点を越える木版画の原画と、リトグラフならびに銅版用の数百の原画を、さまざまな出版者に提供した。『主の祈り』、また1857年から1874年にかけて仕上げられた木版画シリーズの、『鐘』、『家庭のために』、『日曜日』、『新しい花束』、『日用の糧』、『画集』、『絵とヴィニエツト』が息子の出版社に委ねられた。本人も述べているように、これらの作品において芸術家は挿絵の目的にとらわれることなく、神から賜った才能を自在に発揮することができた。そのような自由を得たことで、彼の創作の喜びは増大し、仕事の重荷は減少した。

1856年6月に娘ヘレーネの結婚式の祝いが済むと、そのあと彼の家はいちだんと寂しさを増した。今度は、彼のもとに一人残った娘エリーザベトが家政を引き受け、彼が亡くなるまでよく世話をした。彼は九月にホルシュタインを旅行した。ヴィーガントの依頼で、クラウス・グロートの童謡集『庭さきで』に挿絵を付ける仕事を引き受けたのである。そこで彼は、低地ドイツ語のこれらの詩句に郷土色を与えたその地方の土地と人々を一度じっくり観察しようと考えた。というのも、それまで彼はそのようなものの絵画的な面を見出すことに成功していなかったからであった。

その年の末頃にはベルトルト・アウエルバハと頻繁な交際があった。アウエルバハは、彼のドイツ家庭暦のための挿絵の共同制作者として、カウルバハやラムベルクとともにリヒターを雇い入れていた。シュヴァルツヴァルトの農村小説でドイツ中から好感をもって受け入れられたこの作者とリヒターは、1845年以来、旧知の仲であった。この物語のシュヴァーベン特有の民謡調や、青春時代の感銘がもたらした自然な個々の細やかな描写に、リヒターはたいへん多くの芸術的喜びを見だし、ヴェルテンベルクのシュヴァルツヴァルトをめぐる旅の途上、アウエルバハが生まれた村ノルトシュテッテンと近隣の官庁所在都市ホルブを訪ね、お気に入りとなったこの田園小説に登場する光景をスケッチした。

さらに大きな次の作品『シラーの鐘の歌』の版画は、その大部分が1857年にロシュヴィッツの古風な農家で創作された。その家については、彼自身が次のように書き記しているが、いくつかの木版画に美しく描かれている。「五月の末から、ふたたびわたしはこの小さな家の二階で暮らしています。おまけに、(コッチェンの葡萄畑の中にある)たいへん古いが、素晴らしく美しい小屋に、仕事用の小さな一室を借りました。ここは今すごく静かです。というのも、家の住人は二人の老人とその息子だけで、昼間は山で野良仕事をしているため、誰の姿も見えず、声も聞こえないからです。部屋の窓からの眺めは素晴らしく、わたしにとっては内容のある眺めです。この閑静な小屋は山のはずれにあり、高台の麓で輝くエルベ河の水面には、幅広のエルベの谷がひろがり、南の遠いベーメンの山々から、西のマイセンの高地までが眺望できます。この風景にはわたしの人生の一片を見る思いがします。わたしの向かいのロシュヴィッツまで、町から道がのびています。その道を越えたところに、小さな森の補鳥場があります。アウグステを見送ったあの晩秋に、わたしが腰をおろしたあの場所、そしてまた別の日、ナリシュキン侯のお供でフランスへ行くため彼女と別れる決意を迫られた、あの場所です。ロシュヴィッツ村、そこでわたしは彼女と幸福な日々を過ごしました。今わたしがいるこの山の麓からは、灌木の間に、ロシュヴィッツの小さな墓地と愛するアウグステの墓が見えます。27年の歳月を彼女とともに幸福に暮らしました。哀れみをもって神が、主の聖なる道にわたしをお導きくださり、最期の日々が至福なる成就の日となりますように!」

リヒターはライプツィヒ聖トーマス教会の合唱指揮者モーリッツ・ハウプトマンとごく親しい間柄になった。両人は1859年のシラー記念祭にライプツィヒ大学から名誉文学博士号を授与された。1851年から1861年にかけて、四季によって分類された60枚の木版画からなる『家庭のために』が刊行された。画家は、自分の姿ではなく、自分の置かれた状況と気分で、自分自身を繰り返し描いた。たとえば、「子供部屋にいる祖父の苦悩と喜び」というリヒターの絵は、娘ヘレーネの子供部屋での自らの苦悩と喜びを描いている。『家庭のために』に描かれた最後の作品は、「郷愁」と題する秋の絵である。リヒターはこの絵を、1861年に、愛する嫁の死によって受けた悲しい感銘をもとに創作した。

長年にわたる、また1850年から1856年にかけての、きわめて過度の精神的緊張の影響で、1859年、リヒターは重度の神経症に罹った。それにくわえて失明の恐れもある危険な眼病も併発した。このような病気の第一の原因は、『聖夜』の彫版作業において眼を酷使したことであった。こうした苦悩は、辛い病気によってさらに苦しいものになり、彼はこの苦しみを堪えなければならなかった。眼科医の指示で、1860年の春に彼は娘とともに薬草治療のためにクロイト温泉に旅行した。もちろんこの治療が完治をもたらすことはなかったが、これによって症状はすこぶる改善された。

ミュンヘンの駅でシュヴィントとばったり出くわしたリヒターは、説き伏せられた末に、シュタルンベルガー湖のほとりにあるシュヴィントの別荘について行くことになった。ユーモアに富んだこのロマンティックの独創的な人柄について、日記には、簡略だがよく特徴を捉えたこんな描写がある。「実に愛嬌のある姿で、シュヴィントは家族のもとへ、洋梨とソーセージの入った籠を引きずって行った。街道沿いの何もかもが心から楽しめた。森。美しい夕べの空。山々やブナの森を照らし出す燃えるような光。『ご覧、素晴らしいじゃないか。』考えなしの心のこもらない仕事に対して、彼はあつく反対を唱える。『誰かが一本の美しい樹に愛情と喜びを抱くなら、その絵には彼の愛情と喜びがともに描かれていて、へボな奴が綺麗に描き写したのとはまったく違って見えるものさ。』『自然のあらゆる美や不思議の秘密を解きあかすには、繊細で汚れない、すぐれたセンスが必要だ。』わたしたちが湖を渡った頃に、日が暮れた。彼は家族の者にヨーデルで呼びかける。遠くの森の中からヨーデルの答えが返ってくる。アンナと姪がパパに抱きついて歓声をあげる。少し生真面目な妻には優しい抱擁。実に可愛らしい木組みの小部屋で夕食、錫の皿や壺が飾られている……」

この旅が彼の精神と肉体にいかなる結果をもたらしたのか、リヒターはこう書き留めている。「この旅はわたしにとって、まるで魂の療養のようなもので、身に付いたたくさんの都会の汚れを綺麗に洗い流してくれた。でもまたたくさんの煤が付くのではないかと心配だ。アカデミーの派閥争いは今が山場であり、わたしはその当事者でもなく、みずから参加したくもないのに、そのもめ事場にいる。その空気はさわやかな森林の空気とは違う。――

……一週間後、ふたたび仕事を開始した。この仕事にはたいへんな慎重さが必要なのに、作業に許されているのはたった二、三時間に過ぎない。だが、当初期待していたよりも事は順調に進んでいる。」

しかし、快復したはずの状態も長くは続かなかった。すぐにまた神経症が起り、それとともに、妻の死以来、時を追って徐々に悪化していた鬱病の苦しみも始まった。1861年夏、病気は彼をロシュヴィッツの山頂から下界へ降ろした。シュヴァーベンとエンガーディーンをめぐる徒歩の一人旅で心身を爽快にできると思われたが、ほとんど旅の間中ずっと、彼は暗く悲しい気分が襲われた。その時期の日記のどの記述にも、そのような気分が窺える。

マイニンゲンの皇太子から、リーベンシュタインの別荘のためにフレスコ画の原画を制作してほしいとの依頼を受け、1862年、リヒターは心地よいこのテューリングゲンの湯治場に赴いた。「皇太子のもとで過ごすリーベンシュタイン滞在は、わたしにとってこのうえなく快適で楽しいものでした。この人物と美しい若い奥方の、高貴にして、愛すべき、自然な態度には感激しました。それはわたしにいくらかの緊張をもたらしたのはのですが。」

1863年の夏、リヒターは、ガーバーに嫁いだ愛娘エイミーをなくした。その後まもなく、年老いた母もこの世を去った。

『家庭のために』の続編として、1864年に『家庭のための新しい花束』が出版された。この冊子の最後のページで、同時に連作全体の最後を飾る絵には、クラウディウスの有名な夕べの歌の最後の詩句が付されている。彼のお気に入りのこの歌には、すでに何度も挿絵が描かれていた。折にふれて彼は、親しい人との会話や手紙の中で、この詩の箇所を好んで引用した。たとえば、1854年には次のように書かれている。「ひとたび争いが起こったら、フィナーレはいつもあの敬虔な老クラウディウスの歌の文句です。『われら哀れな人の子は、ただ哀れな罪人にして、多くを知らず』。——これはたしかな真理です。

そしてそれから、ふだん上手く声の出ないわたしはさらに心の中で、「神よ、汝が救いをわれらにお示しあれ……」と歌います。

別の箇所で彼が「どれも珠玉の一行！」と述べているこれらの引用詩句は、リヒターの考え方や感じ方にとって重要な、実践的なキリスト教的人生の叢智のエッセンスを含んでいた。絵を通じてこの叢智を知らしめること、また『家庭のために』の序言において自らその同志として肩を並べたあのヴァンツベックの使者に倣い、ドイツのキリスト教家庭にこの叢智をもたらし、それこそが彼の芸術の最高の最終目標と見なされたのであった。1866年の重大な戦争時件の最中、彼はロシュヴィッツで『われらの日用の糧』という作品に取りかかっていた。連作『日用の糧』の他に、この年にリヒターはライブツィヒの出版業者のためにいくつかの挿絵の仕事をこなし、自分の想像力にはまだ十分に人を惹きつける創作力があることを自覚して喜んだ。しかし、「この両眼がもっと見えるものなら」と彼は嘆く。「問題はこの眼だ。」視力の低下が進んだことで、好ましく思い始めた木版画の仕事をやむなく諦めざるをえなくなった。特に彼の気持ちを曇らせたのは、数年前から胸中に暖めていた二つの計画を断念しなければならないことであった。それらの計画を実行に移すことが、自分の芸術活動を締めくくるのにもっとも相応しいことのように思われていた。それらの計画とは、民衆的な挿絵を付した小型の新約聖書と、ドイツの詩人たちの肖像画のシリーズを編纂することであった。今や彼は以前に比べ、目にあまり負担のかからないもっと大きな絵の仕事に向うようになり、新しい絵のモチーフを探すだけでなく、以前に制作した木版画を自由に描きかえたり大判にすることによって、水彩画やセピア画を創作した。ちょうどこの時期、その頃もイタリアで修業を続けていた昔のアトリエ画家たち数人との手紙のやりとりや、友人シュノルとの頻繁な交流によって、イタリアの自然の理想美を懐古する憧憬の想いが、彼の心の中に生き生きと目覚めた。

そのような感銘を受けたりヒターは、1823年から25年にかけてイタリアの自然を描いた夥しい数の習作集を利用して、点景を添えたイタリア風景画を創作し、何点かは水彩画に、また何点かはセピアのペン画に仕上げた。

南国への憧れに導かれて、1869年の夏には娘エリーザベトと姪を伴い、スイスを抜けて上部イタリアの湖や、ミラノ、ヴェニスを旅した。

旅から帰ってまもなくすると、『画集』というタイトルで、彼の最後の木版画集が出版された。1869年12月12日付けの手紙で彼はこう書いている。「この新しい冊子『画集』は、どこでも評判が良いようです。成功はまったく期待していませんでした。なぜなら、全体としてこの小冊子をあまり気に入っていませんし、できるものなら別の方法で自分の木版画の仕事を締めくくりたかったからです。もしかしたら数年内にそのようなものを作ることができるでしょうか。本当は、天上や内面を示す芸術的示唆と暗示に富んだ、もっと真摯な調子が醸し出されるようなものを世に出したいのです。」この願いは実現されずに終わった。

創作活動に終止符の打たれる時が迫っていた。眼の衰えと体力の減退は限界に達し、芸術活動は——彼が自分で表現しているように——ほとんどゼロの状態にまで低下し、数年後には完全に途絶えた。自分の理念をもはや絵筆で表現することができず、理解も共感もできない最新の芸術傾向のまっただ中でよそよそしい孤独感を感じた彼は、自分の考え方と感じ方で、過去へ逃避した。

青春時代の日記帳を取り出すと、彼は自伝を書き始めた。もっとも身近な者の願いに心を動かされてのことであった。ちょうどその頃、キューゲルゲンの『青春時代の回想』が世に出た。1867年に他界したこの愛する友とは、最後まで手紙が交わされた。昔のドレスデンや、そのありさまや人々を、絵画的にユーモラス

に描いたこの本は、リヒター自身の青春の思い出を甦らせると同時に、そのような刺激によって、好ましくもなかった始めたばかりの執筆作業に、形式や叙述に関する示唆を与えてくれた。

人生の最終段階に入ったりヒターの生活の内側と外側をもっとよくかいま見せてくれるのが1870年8月15日付の次の手紙である。「突然に起こったそれらの大きな出来事はドイツの運命にとってゆゆしきことです。そうしたことのどれも、たしかにわたしの病状を悪化させたりはしませんでした。個人的関心を惹くことは少しもありませんでした。なぜなら、政治的かつ教會的なこの事件において、私たちが明確に認識しなければならないのは、まさに神の力強い御手なのですから……。

今わたしたちのような者は、芸術家として、同業者たちの間で、まるで自分をよそ者のように感じています。他人の言葉を正しく理解できず、また他人にも自分を理解されないよそ者です。わたしたちが高く評価し、敬愛し、尊重するものを、わたしたちよりもっと若い世代は冷淡に見過ごします。彼らが賞賛し、熱狂的な賛同を送るものがわたしたちの関心を惹くことはほとんどなく、それどころか、ある者にとってはしばしば不快で忌まわしいものにさえ思われるのです。

今のわたしには、まるで自分が、舞台から降りた役者のように思えます。観客席に腰をおろし、今度は他の仲間に関わりさせているかのようです。なぜなら、わたしの芸術活動はほとんどゼロの状態にまで低下しているからです。——その理由のひとつは、眼の具合がとても悪く、手も当てにはならないということがありますが、主たる理由は、もう長いこと想像力が休止していて、ふたたび飛び立つことはおろか——立ち上がることもできないということなのです。」

これは彼が、この友人に宛てることのできた最後の手紙であった。というのも、この年の11月14日に、ユリウス・テーターが病気でこの世を去ったからである。そのわずか数カ月後、シュヴィントも逝った。

1872年には、巨匠シュノル・フォン・カロルスフェルトが天に召された。彼の死によって、リヒターの芸術家仲間是一段と数を減らした。

リヒターに必要なのは、平穏で閑静な隠遁生活となった。「静かで平和なわが家、小さくても快適な避難所、はるかかなたを見渡せて、自然のごく些細なひとつひとつが眺められる住処、それこそ今もわたしが望むすべてです。自然や芸術や神と触れあうことがわたしにとってもっとも愛すべき、最善にして最高のことに他なりません。今の大きな都市に見られるような、表面的で、小賢しいばかりの、見せかけだけを信奉する無遠慮な行動は、わたしには心底厭わしいものです。」

多くの作品を生み出した多忙な活動時期に比べ、その頃の生活状態は向上していたにもかかわらず、リヒターの家庭生活は非常に質素で、慎ましい暮らしぶりであった。なぜなら、ちょうどこの時期の彼は——子供たちに遺した文書に詳しく語られているとおり——生活を切り詰めても貧しさに変わりはなく、他人が自分の努力の成果を利用しても、妬むことなどなく、こうした私欲のない謙虚な姿勢をもっていたために疑いをかけられたり、さまざまな病気に見舞われたりしたからである。故郷で耐えた苦しみを思い出し、時には暗い、辛い気分が彼を襲ったが、そうした場合にはキリスト者としての自分の人生観によってそのような気分を乗り越えようと努力した。そんな気分の中で、彼は1872年ドレスデンで次のように書いた。「長いながい間、わたしはここで苦渋を嘗めてきました。そして今もまだ完全にはそれから解放されてはいません。ですが、人は徐々に穏やかに、そして忍耐強くなるものです。本当に良いこと、完全なことをどこで探さなければならないのか、わたしたちはそのことを神の慈悲を通じて知るのです。それがただ分かるだけでも、そしてその目標に向かって、しっかりとした足どりで、純真な気持ちをもって進んでゆけるなら、それこそがきっと至福に満ちた天からの贈り物なのです。そしてわたしたちは、本来そのことを日々感謝しなければなりませんし、主の御手を頼りに前進しなければなりません。」

1872年に企てられたヴェルテンベルク旅行でリヒターは、バート・ホルのブルームハルト牧師を訪ね、この人物の人柄と穏やかで寛容な精神（諸宗派和解説）にたいへん感動した。

絶え間ない不眠症を伴ったりヒターの神経症は、1874年から1875年にかけて、天然鉱泉を繰り返し用いる

ことで一時的な快復をみせはしたが、これが原因で彼はついに長年の計画を実行に移し、アカデミーの教職を辞することを決意をした。1876年、退官願いは受理された。

外界に対する眼差しが曇れば曇るほど、また愛する芸術がそれによって近寄りがたいものになればなるほど、彼の心の眼差しは、キリスト教の中心を形づくるあの永遠なる事物の観察にもっぱら向けられるようになった。そうしたもののなかには彼は慰めを求め、自己の芸術からの決別に代わるものを見いだした。

こうした決別が彼にとっていかに難しいことであったか、そのことはいくつもの文書から見てとれる。その中のひとつにはこう書かれている。「わたしはこの頃ときおり考える。もしもわたしが、同僚たちの多くと同じように、自分の幸福な精神生活をただ芸術とその修練の中にだけ探し求め、そしてそれが突然自分から消えてなくなってしまったら、自分はどうなってしまうだろうか、と。そんなことになった人間は、紛れもなく心の張りを失ってしまうにちがいない！」

人生最期の年にあたる1884年を、彼はますますの健康状態で迎えた。しかし、冬が過ぎ、春が訪れる頃になると、時折り失神の発作に見舞われ、そんな場合にはいつもしばらくの間、憔悴しきった無気力な状態が続いた。6月には心臓炎に罹った。たしかにこの病気そのものは、わずか数日後には早々に消えはしたが、体力の減退は続き、昼間はずっとソファーに腰かけて休息をとらなければならなかった。精神面は良好であったため、周囲のものや、自分の関心を惹くものにはすべて、ふだんと変わらない興味を示した。何か読んで聴かせてもらうときは、つねに格別の喜びを表した。6月19日も、たしかに疲れを感じてはいたが、たいへん明るい気分でソファーに座ったまま日がな多くの訪問を受けていた。娘のエリーザベトと一緒に夕食を済ませた後、少しばかり室内を歩きまわり、突然、悪寒を訴え、床についた。しかし、その後まもなく、娘が彼のもとへ行くと、彼は突然息苦しそうに喘ぎはじめ、わずか数分後に息が途絶えた。生前と同じ安らかな表情のまま、彼は天に召された。——生誕の地フリードリヒシュタットにある、カトリック教会の新しい墓地に彼は埋葬された。土砂降りの雨であった。

墓の盛り土の上には十字架が立っている。それには、死んだ妻がロシュヴィッツの自分の墓に書かせたのと同じ言葉が碑文として刻まれている。「キリストはわが生命なり、死はわが得たりしものなり。」

亡くなる9ヶ月ほど前に、年老いた画家は日記にこう書き込むことを許された。「9月28日——80歳の誕生日——が近づいた。」

リヒター自らがその祝いの言葉を、並々ならぬ賛辞で詳細に語っている。その末尾に彼はこう書き添える。

「仕事は自分自身にとって最高の喜びでありました。わたしの仕事の良いところ、賞賛すべき点は、それが単に学んで与えられるようなものではないことであり、わたしたちに与えられている神の賜、すなわち才能にあることです。

わたしの青春時代は、貧しく辛い、気詰まりなものでした。両親はふたりとも心優しい人でしたが、互いを理解し合えず、絶え間ない諍いが生活を暗くしました。また、収入も不足したため、それによって生じた心配事がさらに親たちを不機嫌にしました。わたしの修業時代は労働の期間でしかありませんでした。何も学べず、学べても僅かでした。ローマに行って初めて、渴望し助けを求めていたわたしの精神は、あらゆる方面からの刺激を受けました。わたしは幸福の絶頂にあり、豊かな生活と努力が始まりました。わたしの理想は、いわゆる歴史風景画の方面にあり、わたしはそれを自分流に展開させようと考えていました。

帰郷するとすぐに、ふたたび生活苦に見舞われました。幸せではありましたが、結婚が早すぎたため、やりくりで苦勞しました。七年間のマイセン時代と、それに続くドレスデンでの最初の数年に、わたしの上ののしかかった重圧はとても大きく、天上の気高い花々が咲くパルナスの庭に自分の小さな居場所を得たいと努力をしてはいましたが、その夢は達成不可能のように思えました。そんな頃、木版画が流行し、老デューラーの手招きに従って、わたしはこの枝を育てたのです。わたしの芸術は、パルナスの山頂に咲くユリやバラのもとには到りませんでしたが、それと同じ高台の道ばたや斜面に、茂みや野原に、花開きました。足を休める旅人たちは、それを見て喜び、子供たちはそれで花束や花冠を作り、孤独な自然の友も、まるで天へ

の祈りのように昇って行くその香りと色にふれて、爽やかな気分になりました。そのような神のお計らいにより、かつては知らず、また探そうともしなかった方面で、思い上がって夢見た願い以上のことを、わたしは成し遂げたのです。」

〔註〕

訳出にあたっては主に以下のテキストを参照した。

Ludwig Richter, *Lebenserinnerungen eines deutschen Malers*.

Selbstbiographie nebst Tagebuchniederschriften und Briefen von Ludwig Richter. Herausgegeben und ergänzt von Heinrich Richter. Mit einer Einleitung von Ferdinand Avenarius. Neue reich illustrierte Ausgabe. Hesse & Becker Verlag Leipzig. 1909.

Ludwig Richter, *Lebenserinnerungen eines deutschen Malers*.

Ausgewählt und herausgegeben von Marianne Fleischhack. Christliche Verlagsanstalt Konstanz, o.J. (1955).

Ludwig Richter, *Lebenserinnerungen eines deutschen Malers*.

Erweitert um einen Auszug aus den Ergänzungen von der Hand des Sohnes Heinrich Richter. Herausgegeben von K. Wagner, Evangelische Verlagsanstalt Berlin, 1982.